



# *International Student Center News*



金沢大学

留学生センターニュース

*vol. 7  
January 2004*



りゅうがくせい

# 留学生センターのホームページを知っていますか？

みなさんは留学生センターのホームページを見たことがありますか？ センターが提供するコースの紹介や時間割などが載っています。

日本語版（下図）のほかに、ほぼ同じ内容の英語版もあります。

ほかの留学生にもぜひ教えてあげてください。

## 日本語版 URL

<http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp>

## 英語版 URL

<http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp/eg/kuisc.html>





# 留学の機会を活かそう

中山 謙二 (留学生センター長)

国や民族の生い立ち、社会システム、宗教、生活習慣などの違いを超えて世界の人々が互いに相手のことを真に理解することは大変難しいことでしょう。このことは、今なお世界で戦争、紛争が絶えないことからわかります。一方で、近年、通信手段や交通手段が非常に発達し、また、産業構造や政治、経済などいろいろな側面で国境を越えた展開が進んでおり、人々は必然的に他の国や地域の人々と政治、経済、社会、宗教、教育といった様々な側面でいろいろな関係を持つこととなります。諸々の違いを乗り越えて相手のことを真に理解する努力が非常に大切になります。

自分の国で書物や新聞、ラジオ、テレビなどを通して得られる情報には限りがあります。マスメディアはややもすると、伝える内容が表面的であったり、内容がセンセーショナルに扱われることもあります。物事の底流をなしている本質的なものはあまり伝えられません。一方、実際にある国に滞在し、その国の様々な状況を肌で感じ、知識ではなく体験として、生活感覚として感じることで、初めてその国の人々の考え方、及びその底流をなすものが理解できます。留学生にはその貴重な機会が与えられています。この機会は、留学生本人が大変な努力をして得た場合もあれば、運良く与えられた場合もあるでしょう。いずれにしても、他国で学ぶという貴重な機会を自己形成に大いに活かしてほしいと思います。

自分の専門の勉強及び研究も大切ですが、その国でしか体験できないことにも積極的に参加するようにしましょう。日本人学生や地域の人達、他の国からの留学生との積極的な交流があつて初めて留学の機会を活かすことができます。初めて留学する学生にとっては、友達もない、生活習慣や気候も違う、不安な環境ではありますが、同時に、そこには自分の知識、見聞を世界的に広げられる空間が広がっています。この機会を大いに活かしてほしい。

留学生センターは、留学生の多様な目的に応えられる教育プログラムを提供しています。留学生センターが中心になって行うものや、金沢大学全体で協力して行うものがあります。また、留学生センター及び留学生課は留学生が安心して勉学研究に取り組むための支援を行っています。しかし、最も大切なことは留学生自身の意識です。日本で、金沢で生活し、金沢大学や地域で学ぶことの意義を十分に理解して、有意義な留学生活を送って下さい。

# 国際教育研究部門と新任教官の紹介

2003年度4月、金沢大学留学生センター内に、国際教育研究部門が設立されました。私は、この部門の仕事を担当することとなった、新任教官の齊木麻利子です。ここでは、ご挨拶を兼ねて、この新しい部門の役割についてお話します。

国際教育研究部門の大きな役割は、次の二つです。

一つ目の役割は、留学を希望する日本人学生を支援することです。勉学や研究に携わる多くの金沢大学生の目が、世界に向けられています。「専門分野の最新の知識を学びたい」「語学を習得したい」「大学院で学びたい」など、学生の留学目的は様々です。また、学生が希望する留学期間も、長期の場合もあれば、数週間という短期の場合もあります。国際教育研究部門では、学生一人一人のニーズやプランに耳を傾け、きめ細かなアドバイスができるよう、努力したいと思っています。

国際教育研究部門の二つ目の役割は、留学生の英語学習を支援することです。大学や大学院に在籍するほとんどの人にとって、英語の知識は必要不可欠なものです。英語は、今や、研究や学習の成果を上げるための道具の一つだと思えます。しかし、出身国や出身地域の教育制度上、やむをえないことなのですが、英語の知識に関していうと、日本人学生と留学生との間に、時として大きな隔たりがあります。また、一部の留学生が、英語という道具に磨きをかけるのに、特別な援助を必要としているのが現状なのです。今年度、国際教育研究部門は、学長裁量経費を受託し、「金沢大学留学生のための英語教育改善プロジェクト」を立ち上げ、留学生の英語学習環境の整備に着手しています。

私自身、アメリカでの長い留学経験があります。私はこれからも、自分の経験のすべてを活かしながら、金沢大学留学生センターの一教官として、日本人学生と留学生両者の学習支援に、精一杯の力を注いでいこうと思っています。

国際教育研究部門：齊木麻利子



石川県小松市「お旅祭り」にて

# 第4期・日韓共同理工系学部留学生コース

(通称：日韓プログラム)

第4期からは今までと選抜方法がまったく変わり、先に日本の配置先大学を決定してから韓国側の予備教育が始まるようになりました。昨年12月の段階で、ユ・インヒョン君（理学部数学科進学予定）、ウー・スンヒョン君（工学部人間・機械工学科進学予定）、キム・ソル君（工学部電気電子システム工学科進学予定）、以上3名の本学配置がすでに決まっていた。また、配置が決定した時点では日本語力がまったく問われていなかったのも第4期からの一大特徴です。

このような状況下でどのくらいの日本語力と（すでに配置が決まっているため）やる気をもって来日してくるのだろうか、というのが正直なところ受け入れ側である私の気持ちでしたが、4期生3名はこんな私の不安を一気に吹き飛ばしてくれたと言えます。

4期生の来日は10月6日、福岡経由で小松空港に到着しました。翌日7日はさっそく日本語のプレースメントテスト、9日は合同開講式と何かと落ち着かないスケジュールでしたが、本プログラム始めて以来初めて合同開講式に間に合いました。

学力診断の結果、全体的にまずまずと判定されましたし、奨学金の支給を始めとするスケジュールも順調です。何もかもがすんなりと進むのも、このプログラムが3年間試行錯誤を繰り返しながら積み上げてきた成果の表れと言えるでしょう。

それに3期までの先輩が折に触れて4期生をサポートしてくれるのもこのプログラムの一大特徴です。生活情報や勉強情報を与えるだけでなく、一緒に買い物について行ってくれるなど行動を共にしてくれます。

さて、第4期もプログラムでは3期までとさほど大きい変更点はありませんが、今期からの改善点は、1) 物理に理学部物理学科の現職の先生に加わっていただいたこと、2) 日本人チューターをそれぞれの進学先から推薦してもらったことと、3) 日本事情見学に新しい見学先（金沢大野港からくり記念館）を入れたことです。

今期も今まで同様、彼らがこの半年の予備教育を経て今春本学1年生としてスタートできるよう学業面と精神面の両面からきめ細やかなサポートを心がけていくつもりです。

こうしている間に進んでいる第5期の選考を見据えて、本学に日韓プログラムの学生が引き続き来てくれるよう、今後もプログラムの改良と改善に努めたいと考えています。

日韓プログラム担当：太田 亨



合同開講式にて、左より中山センター長、ウー・スンヒョン君、キム・ソル君、ユ・インヒョン君、太田

# 日本語研修コース

## 専門への橋渡しとしての口頭研究発表プロジェクト

日本語研修コースは、大学院へ進む研究留学生のために6ヶ月の集中日本語教育を初級から行っています。留学生たちは半年後に専門の研究に入ります。期間中の教育として、一般日本語のほかに「専門への橋渡し」が必要であることは明らかです。6ヶ月という期間中に、何をどのように行えば良いでしょうか。ここでは、1995年の金沢大学留学生センター設立以来、改良しながら行ってきた口頭研究発表プロジェクトを紹介します。



【プロジェクトの種類】：アンケート調査に基づく研究発表【プロジェクトの目的と期待される効果】：プロジェクトが専門領域での発表のために役立つことを目的とします。即ち、一般的な研究の方法、口頭発表の言語スタイルを習得し、口頭発表に慣れること、また、コンピュータの利用そのものに慣れ、コン

ピュータの利便性を活用できるようになることを目指します。

【留学生の発表テーマ例】：「日本人と広告」「自動販売機と若い人の喫煙について」「茶髪」「金大生にとって人生の成功とは何か」「ゴミの分別に関する金沢市民の意識」

### 【作業項目】

1. テーマを見つける：日本人論等の読み物（英語）を読み、自分で発見したことについてクラスで皆と討論（英語も可）してテーマを絞る。
2. アンケートを作る：何を明らかにしたいかを考えて項目を選び、後のデータ処理のことも考慮して最適な質問と答（選択肢）を考える。
3. 質問紙によるアンケート調査（日本語）を行う。
4. データ入力：エクセルを使用する。
5. データ分析：度数分布、 $x^2$  検定、t 検定、相関係数・回帰分析を日本語ソフトを使って行う。
6. 考察と結論
7. 発表のアウトライン
8. 発表スライド用箇条書きの方法
9. 発表スライド作り：Power Point を使用し、図表、写真等を効果的に使う。
10. 口頭発表原稿を書く。
11. 口頭発表リハーサル
12. 口頭発表（日本語）なお、口頭発表会には、専門課程の指導教官、日本人学生、地域の方々も招待します。

以上、簡単に紹介しましたが、このプロジェクトは、単なる「日本語による発表」（自分の意見を述べる発表や、自分の専門を紹介する発表）に較べると遥かに高度です。自分でデータを集め、統計的手法を用いて分析し、最終プロダクトとしての発表ではデータと話すこととの整合性が問われるのです。

敢えてこのプロジェクトを行う意義は、専門課程に進学した修了生からのコメントの中にも見つけられます：「コース中は、なぜこんな難しいことをするのだろうと思ったが、専門課程に進学後、本当に役立った」「専門課程でt検定や $x^2$ 検定を使う」「日本語で発表する練習ができた」



（インタビュー 調査練習風景：  
兼六園で観光客に話しかけて質問します）

（データ分析も楽しく）



（発表が終わってホッとしました）

日本語研修コース担当：三浦香苗

# 日本語・日本文化研修コース 修了研究

## 異国での背伸びと挑戦の1年間

日本語・日本文化研修生（以下「日研生」と記す）は、1年間の留学期間中に日本に関するテーマについて研究し、留学期間の終わりに一人15分間の口頭研究発表を行います。更に行った研究を文章化し、レポートとしてまとめて提出します。研究も口頭発表もレポート作成も無論日本語で行わなければなりません。来日以前の日本語学習期間が約2、3年の学生が多いとは言え、テーマ探しからスタートして1年間でオリジナリティーのある研究に仕上げることは至難の業です。

研究指導は全体と個別の両レベルで行っており、コースの研究計画に基づいて段階的に研究が進められるようになっていきます。必修科目である「調査実習」の1学期目で、日本人学生との合同のグループで模擬研究を行います。この模擬研究は、3乃至4のグループに分かれて行いますが、お互いに研究を評価し合うことにより、自分の研究をより客観的に評価する姿勢を養います。興味深いことに学生同士の評価が教師の評価よりも厳しいという傾向が見られます。「調査実習」での模擬研究は、日本人学生との共同作業を通して相互理解を深める目的も兼ねていますが、研究方法論を身に付けてもらうことが第一の目的です。「調査実習」の2学期目には2週間に一度の頻度で、研究の各段階に応じて、個人の研究テーマについて報告を行います。

無論、全学生が足並みを揃えてスムーズに個人研究を進めるわけではありません。「問題意識」とは何かを理解させるために数ヶ月もかかってしまう場合も珍しくありません。そのような場合は慌てることなく、何度でも研究室に来てもらい、様々な例を出して「問題意識」の説明をするほかありません。日研生は学部3、4年生であり、この修了研究が初めての研究であるという学生が殆どです。自分の母語ですら聞いたことのない抽象的な研究の専門用語を理解するのに苦しむことは当然のことです。

公開口頭研究発表会の前の一週間を大抵発表練習に当てています。留学生はそもそも本番に強い上、プレゼンテーションスキルも上手であると言えます。しかしながら、大勢の人の前で、しかも日本語で発表することは大変な緊張感を伴うことであることは間違いありません。練習の一週間は、一人一人に自信を持たせるために最大限に気を配りますが、この期間中の日研生の成長には目を見張るものがあります。緊張感の中から生まれる達成感や自信のみならず、一体感、助け合いの精神、思いやりこそが日本留学の最大の成果と言っても過言ではないでしょう。



帰国前に提出するアンケートで、「修了研究をやってよかったか」という質問に対してほぼ全員が「やってよかった」と回答します。修了研究は1年間という短期間に学生の持っている無限な潜在能力を最大限に伸ばすために行うので、指導する側からすれば、上記の回答は大変嬉しいものです。

研究方法論は単なる道具に過ぎず、その道具を今後どのように磨き、何に使うかは学生次第であることは言うまでもありません。しかし、客観的な分析力を身につけることは、自分のテーマについてのみならず、外界一般を客観的に捉える力をも身につけることでもあると思われまます。「新しい自分を見つけることができた」とアンケートで回答した学生もいましたが、そのことは外界を多角的に見られるようになったことを意味するのでしょうか。

日本で手に入れた新しい道具を帰国後も有効に使ってほしいと願っています。そして、研究方法論もさることながら、最大限に背伸びし、自分の能力に最大限にチャレンジしたことで得た自信や大変なことを一緒に成し遂げることによって身につけた人に対する思いやりや優しさも日研生の今後の人生の糧となってほしいと願って止みません。



日本語・日本文化研修コース担当：  
ルチラ パリハワダナ



# 金沢大学短期留学プログラム (KUSEP)

Bauer, Anemone

ドイツ、レーゲンスブルク大学



## 一年間の留学を振り返って

去年の10月から金沢大学に留学する機会があり、金沢大学短期留学プログラム (KUSEP) に一年間参加しました。

ドイツの大学で専攻が日本語ではなかったのですが、日本語が上達できるように日本に留学したかったです。毎日日本語クラスがあったので、レーゲンスブルク大学の一週間 2時間の学習より本当に効果的でした。日本語クラスは大変だったけれども、午後とか夜に暇な時間があったので、いろいろな活動ができました。友達も作る事ができました。

それで暇な時も楽しく日本語の練習ができました。KUSEPの中では日本語の授業だけではなく、午後に他の授業を選べます。KUSEPの留学生の専攻はいろいろなので、この選択する授業もそれぞれに分かれ勉強をしました。

私にとって、日本は大変興味深くていろいろ知りたかったのですが、一番興味があった授業は日本についての授業でした。例として、日本文化体験とか武道クラスが大好きでした。日本武道クラスというのは、杖道の練習でした。金沢へ来る前、ドイツで金大のシラバスを読んだ時、エ〜？ 杖道って何？ 英語の翻訳 (the Way of the Stick) を見ているのに分りませんでした。Stick と言えば、杖、棒、どう違うかな。7年間空手道をやって、いろいろな古武道武器を知っていたけれど、杖は聞いたことがなかったです。面白そうだと思って、最初の授業を見に行きました。最初のクラスではまだ自分で練習できませんでした。ビットマン先生に杖道を紹介していただいて、演武を見て、私の中に興味がわいてきました。それから毎週練習して、もちろん春学期にも武道Ⅱを選びました。練習すればするほど面白くなってきました。夢中になってしまったので、一週間一回ではたりないと思って、ほかの留学生と夜にも練習しました。そして、夏休みに2人の学生が静岡で杖道の初段審査を受けられたのは先生のおかげです。

日本での複雑な手続きや困ったことがあった時は留学生センターの人が助けてくれました。彼らのおかげで日本での生活を楽しむことができました。

最後に、留学生センターの皆さん、指導教官、先生方にこの一年間大変お世話になりました。心からありがとうございます。



Marathe, Smita

インド、プネー大学

## 恵まれた時間

金沢大学での2002年10月から2003年9月までの一年間の留学は素晴らしい体験でした。私は金沢大学の留学生向けの Kanazawa University Student Exchange Program (KUSEP) というプログラムの学生でした。日本国際教育協会の奨学金を得て、このプログラムに参加する機会をいただいたのは、ありがたいことだと思います。

このプログラムに参加したのは、色々な国からきた28人の留学生たちでした。一人一人の専門は別々でしたが、「日本」をよく理解するという共通な目的がありました。このプログラムに参加した留学生たちは皆、世界中のいろいろな国から来ていたので、本当の「国際交流」もできたのは、何よりも大切なことだと思います。

この一年間に、大学で勉強できる科目は数多かったもので、個人の興味によって選択することができました。例えば、日本語、日本文化体験、日本事情、日本経済、法律、環境科学、数学、日本心理学、工学だけでなく、日本の伝統的な「武道」のような技も実際にプログラムの科目として習うことができます。自主研究もできたのはとってもよかったです。

留学生センターのいろいろな授業は面白かったし、先生たちもとても優しくかったです。日本語のクラスは本当によかったです。特に、先生たちの教え方はとても気に入りました。日本語クラスのグループ活動として、日本語のドラマを演じたのも、皆友達たちと一緒に石川県のスピーチコンテストに参加したのもすごく興味深かったです。日本語の授業の、技能別としての上級読解、口頭発表、作文、講義を聴く技術などのような授業は日本語能力を高めるために役に立ちました。留学生センターのスタッフのみなさんは親切で、留学生の面倒をよく見てくれました。

「日本文化体験」の授業もとても面白くていろいろ勉強になりました。一年間日本の伝統文化もいろいろ体験して、理解が深まりました。紙をただ折って、きれいな形にする「折り紙」という芸術は本当によかったです。お客さんに対して尊敬を表す「茶道」も素晴らしい体験でした。生け花や書道は日本文化の面白い面に触れさせてくれたと思います。そして、浴衣を着て太鼓を叩いたり、百万石祭りを楽しんだり、一緒に花見に行ったり、蕎麦を作ったりしたのは本当に忘れられない体験です。金沢での留学はとても楽しかったです。この一年間は私の人生の金箔だと思います。

この素晴らしい機会を与えてくれた金沢大学と日本国際教育協会に心から感謝しています。また機会があったら是非金沢大学へ進学したいと思います。



# 相談指導部門

ルールを守って、自転車に乗りましょう！～交通事故を起こさないように、交通事故に遭わないように～

留学生のおよそ2人に1人が、自転車に乗って通学しています（金沢大学2002年留学生生活実態調査）。自転車には簡単に乗れますし、どこへ行くにも、また荷物を運ぶにも便利な乗り物です。でも、その便利さが事故に繋がる事が多いので気を付けましょう。次の4点には注意してください。

## ① 自転車に乗る前の点検

ブレーキが効くかどうか、必ず確かめましょう。特に、角間キャンパスから金沢市内に向かう時には、急な坂道を下って走ることになります。坂道の途中で、ブレーキが効かない事が分かったら———!!!（痛々しい結末を書く勇気がありません）

## ② 急な進路変更や自分勝手な運転に注意

自転車を自由に乗り回す楽しさ、風を感じる心地良さで、ついつい交通ルールを無視！と言う事はありますか？ 急な進路変更をしたために、交通事故の被害者となったケースもあります。また、歩道を走っていて、歩行者にけがを負わせたり、出合い頭に自動車と接触事故を起こしたりと、周囲をハラハラ・ドキドキさせる自転車もあります。ルールを守って、安全に乗りましょう!!!

## ③ 夜間にはライトを

夜に自動車を運転していると、暗闇から自転車が突然現われて、びっくりした経験が何度かあります。危うくぶつかりそうになった事もありますが、もし自転車のライトがついていたら、確実に危険はさけられたでしょう。夜には必ずライトをつけましょう。

## ④ 雪が降ったら

雪道では、バランスを崩しやすく、ブレーキも良く効きません。また、スリップし、横転することも多いのです。雪道では、自分の足で歩く方が、安全な事は確かです。

< 留学生の相談窓口———新しく担当される先生もいます >

藤崎 礼志	(自然科学研究科)	234-4927
小田 竜樹	(自然科学研究科)	264-5676
岸田 由美	(工学部)	234-4936
宮崎 悦子	(経済学部)	264-5442
中崎 崇志	(留学生センター・非常勤)	234-4567
八重澤美知子	(留学生センター)	264-5770

# 総合日本語コース

総合日本語コースは金沢大学で学ぶ外国人学生ならだれでも受けられる日本語クラスです。平成15年度前期は、角間キャンパスで96名、小立野キャンパスで46名の学生が受講しました。私たちはこのコースがより楽しくより効果的な授業になるよう様々な試みを行っています。今期の試みを二つご紹介しましょう。

## 1) 日本人学生の参加とメーリングリストの開設

総合日本語コースの授業には随時複数の日本人学生に参加してもらっています。これは、留学生の日本語力向上の手助けだけではなく、留学生・日本人学生双方に出会いと交流の機会を提供することを目的としています。具体的には、「会話練習の相手役をする」「インタビューに答える」「討論に参加する」「スピーチやドラマ発表などを聞いて（見て）コメントを述べる」などです。

こうした活動は従来も行っていたのですが、「人数が十分集まらない」「参加する学生に限られている」などの問題があったため、平成15年度前期に「総合コースの授業に参加可能な日本人学生のメーリングリスト」を作り、日本人学生への授業参加の呼びかけをシステム化することにしました。必要が生じた場合、担当教師はメーリングリスト上で「いつ、どこで、どのような活動を行うか」を知らせ、参加を募るといふものです。これにより、広範囲且つ十分な人数の日本人学生に参加してもらうことが容易になりました。

実際に日本語の授業に参加した日本人学生の感想をご紹介します。

### 「留学生の日本語クラスに参加してみて」

法学部2年 渡部 美紀

私は前期に、留学生の授業に3回参加しましたが、どの授業もとても楽しく印象的なものでした。特に、留学生がそれぞれ自分の国の歴史教育について発表するという授業では、国によって歴史教育にも違いがあることを知り、又、歴史を学ぶことがどれだけ大切なことかを感じました。日本人だけで生活していくぶんには特に問題はないのですが、現代は多くの外国人が日本で暮らし、そして多くの日本人が海外で暮らしている時代であり、日本について聞かれる事があったときに、「わかりません」とは答えたくありません。留学生のみなさんが熱心に自分の国について発表する姿を見て、自分も日本についてもっと知りようと思いました。

授業に参加してみて、今まで当たり前だと思っていたことが、実は日本独特の習慣であることを知ったり、留学生の話を聞いて、「日本の場合はどうだろう?」と考えるきっかけを与えられました。

どの授業に参加しても感じたことですが、留学生のみなさんはとても積極的であり、自分たちで授業を作り上げていこうと頑張っていました。もし、留学生の日本語クラスに参加してみたいと少しでも思っている方がいましたら、是非一度参加してみることをお勧めします。

きつと留学生のみなさんから教えられること、自分自身に問いかけることがあるでしょうし、何よりも楽しく参加できると思います。

なお、この感想に述べられている「自国の歴史教育」についての留学生の発表は、「私の受けてきた歴史教育」というテーマで、「角間ランチョンセミナー」（総合教育棟で行われている金沢大学大学教育開発・支援センター主催のミニ講座）でも行われました。中国、ポーランド、スロバキア、タイ、モンゴルの学生が発表しています。

## 2) 上級クラスでのドラマ

上級のクラスでは、読解や聴解などの受動的な活動と共に、作文やスピーチなどの発信的な活動も盛んに行っています。その中にドラマの上演もあります。これは教師側にも負担が大きいので常に行っているわけではないのですが、今期はEクラスの学生からの強い要望があり、取り組むことにしました。学生中心でドラマ台本作成、練習、発表を行い、コース終了時にはほとんどの学生の発音が非常によくなり、またドラマを契機にクラスのまとまりが非常に良くなるという成果がありました。参加学生の感想をご紹介します。

### 日本語劇『さくら（留学生版）』を上演して

ロウリ・エステル（インドネシア）、許智堯（台湾）

今学期、総合日本語コースEクラスの授業でドラマを脚色して演じることにしました。それはFクラスのドラマを見て私達もやりたいという気持ちが湧き上がり、担当の先生方への要望に答えていただいたのです。

一見楽しそうな活動は、しかし、実に大変でした。まず、どのようなドラマをするか。先生方がNHKの連続テレビ小説『さくら』はどうかと提案してくれましたが、では、どの部分を選ぶか、どんな内容を伝えるのか。相談の末、主人公さくらが体験するカルチャーショックと日本への適応——これを主なメッセージにしました。全体の流れに取り組みれば取り組むほど難しさを痛感しました。また、舞台でどう演じるのかも、担当者（ロウリ、許、スミタ）を中心に多くの時間を費やし、話し合いました。ドラマ作りの過程でも、リハーサルでも色々問題が出てきましたが、本番では何か風のような力が私達に与えられ、信じられない位スムーズに演じることが出来ました。むしろ、「あっという間に終わり、残念だ」と皆が思ってしまったほどです。

私達はこのドラマ経験を一生忘れることができないでしょう。人は、共に何かをすることで互いの繋がりを強めることが出来ます。今回のドラマを通して、Eクラスは皆素晴らしい日本語学習経験ができた上に、心をあわせて努力することで、和の精神や喜びを身に沁みて感じました。最後に、この貴重な機会を与えて、いろいろと助けて下さった先生方に感謝申し上げます。

総合日本語コース担当：峯 正志・長野 ゆり



『さくら (留学生版)』



ひやくまんごくまつり  
百万石祭にて



かいがいりゅうがく  
海外留学フェア2003



なただら  
那谷寺にて

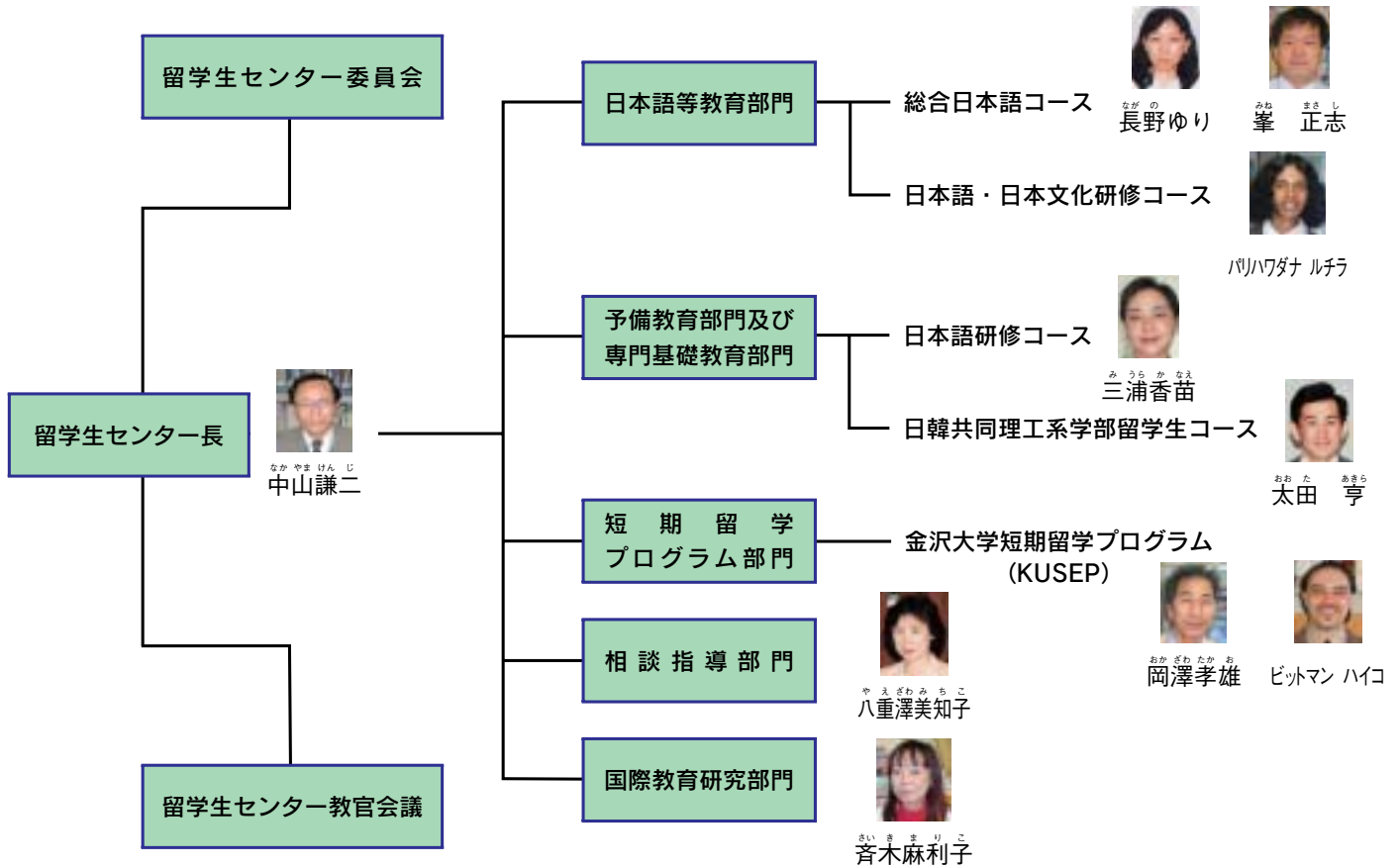


じょうどう きゅうにんていしょう  
杖道の級認定証をもらって

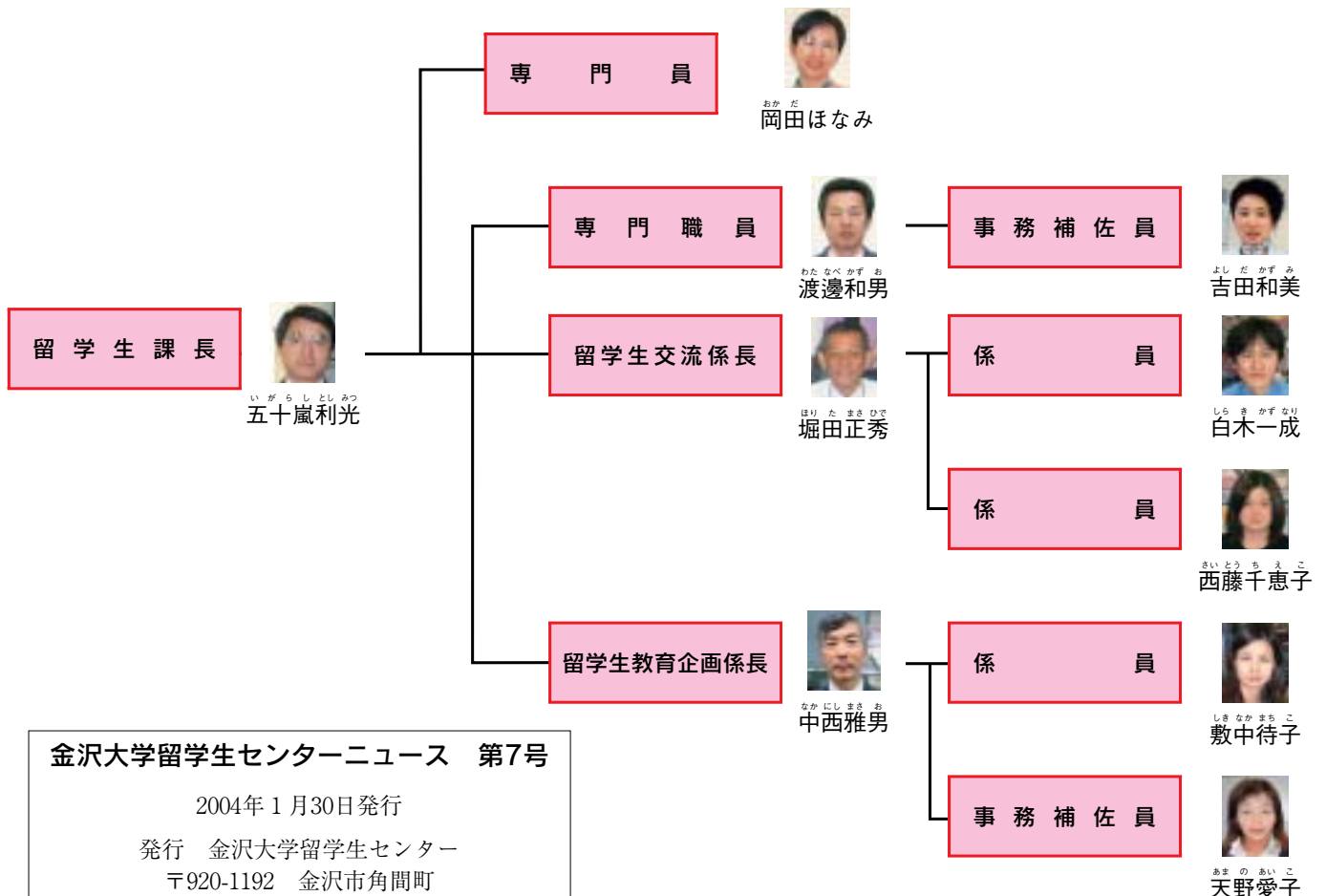


JAPAN TENT 2003における杖道演武

留学生センター組織 (2003年度)



留学生課組織 (2003年度)



金沢大学留学生センターニュース 第7号

2004年1月30日発行  
 発行 金沢大学留学生センター  
 〒920-1192 金沢市角間町  
 TEL (076) 264-5188  
 FAX (076) 234-4043  
 s-ryuukikaku@ad.kanazawa-u.ac.jp